
たったひとつの願い

* shin *

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たったヒトツの願い

【Nコード】

N5847Y

【作者名】

shin

【あらすじ】

神様なんていない。
願いは叶わない。

アノヒトニアイタイ

たったヒトツの願いさえ、叶わないのだから

高校一年生の奏歌は、何でもできる完璧な人。

美人で、学年で三本の指に入るほどの秀才。

中学校では三年間陸上部のエースとして駆け抜けた。

誰にも好かれる明るい性格で、異性からの人気もバツグン

それでも、奏歌に彼氏はいない。

それは一体なぜなのか

誰もが不思議に思っていた。

奏歌はずっと前から、会えることのない人を、一途に思い続けていたのだ。

叶うことのない願いはふくれ、奏歌の運命が動き出す!!

プロローグ くささやカナネガイ

願いは強く願えばきつと叶う

そんなの信じない。

良い行いをしていれば、いつか報われる

そんなことはない。

神様は、良いことをしていれば願いを叶えてくれる

そんなこともない。

神様なんて信じられない。

そもそも、神様なんていない。

神様も、妖怪も、ヒーローもない。

なにもかも信じない。

どんなに願ったって私の願いは叶わなかった。

神様に私の願いは届かなかった。

たったヒトツの、ささやかな願いさえ、叶えてはくれなかった。

アノヒトニアイタイ

たったそれだけの、たったヒトツのことなのに

第一話 くユメノヨウナデアイ

目の前に誰かが、いる。

……だれ？

視界はかすんでいて、よく見えない。髪の毛の長さや体格からして、男の人だろうと、かろうじてわかるくらいだ。男の人が、こちらに向かって手を差しのべるなにかを感じた。

もしかして、この人は

気が付くと私は、彼に向かって歩き始めていた。良く見ると、視界がはれてきている。

黒くて短いさわやかな髪。キリツとしていて、整った眉。シュツとした鼻筋、シャープな輪郭。そして

彼が背を向け、私とは逆の方向へ歩き始めた。

「まって」

私は彼のあとを追いかけたのだが、からだは重くて動かない。紐で縛られているかのようだ。

あの瞳 間違いない。やっと会えたんだ。

あの人に

喜びに浸っているのも束の間。

彼の背中はどうも遠ざかって行く。ここで別れたら、次はいつ会

えるかわからない。でも、追いかけたい気持ちとは裏腹に、私の体はどんなに動こうとしてもびくともしない。

お願いだから行かないで。私を置いていかないで。

彼の背中に向かって願う。

『待ってえ!!』

……。

……。

第一話 くユメノヨウナデアイ (後書き)

プロローグ、一話目と、見てくださってありがとうございます

よりよい作品にしていけるよう頑張りますので、コメントや評価よろしく願います (> >)

第二話 くワタシノネガイ

『待つてえ!!』

「……なにが、待つてなんだね? 夢見?」

「へ!? いや……その……」

状況が全くわからない。辺りを見渡してみる。

幾つもの机と椅子がキレイに並んでいて、その一つ一つに人が座っている。そして奥には緑色の板に、白い文字が書いてある。

そう。教室だ。

「夢見?」

そして私の名前を呼んでいるのは、あの人……ではなく先生だ。どうやら社会の授業中らしい。夢だったのか……

「えっと……あっ! もうOKです」

「何がだ?」

頭のなかで必死に言い訳を考える。

「その……ノートとるのおいつけなくて、待つてもらったんですが、もうできたので大丈夫です。授業を続けてください」

先生は少し考えた後、授業を再開した。

なんとかごまかせたようだ。

少しして、私の視界の片隅に トントン と、机を叩く指が見えた。その指の先にいるのは、隣の席の生意気なくそガキ 魅輝 ミキ だった。

返事するのは面倒だったが、気づかない訳がないので、印象が悪くなると思い、しかたなく魅輝の方を向いた。

魅輝は、私のことを何とも言えない顔でのぞき混んでいた。悲しん

でるといつか、不安というか……とにかく、いつもの陽気でうるさい感じではなかった。

まあ、うるさくない分には逆に嬉しいんだけど。

魅輝は、くしゃんと歪んだ顔で口を開いた。

「な、みだ……を、拭け」

「え!？」

何を言っているのか、良くわからない。ナミダ?もしかして……涙のこと?

「涙を拭けと言ってるんだ」

今度はちゃんと聞き取れた。少し照れ臭そうで、心配なんかしてないぞ と付け足されそうな言い方だった。

あわてて目に手を当てる。離れたその手には、雫が付いていた。

「私……泣いてる」

つぶやくように言う。泣くことなんて、とうの昔に忘れていた。それほどに泣くことは久しぶりだったのだ。

制服のすそを引っ張り、目をゴシゴシとこする。その様子を見た魅輝が、もう一度話しかけてくる。

「びっくりした。その、何てゆーか……悲しんで、悩んで……。奏歌みたいな完璧な人でも、悩みとかがあってあるんだなって……さ」

「そりゃ、あるよ。人間だもん」

それっぽいことを言いつつ、私は悔やんでいた。

本当の感情は決して無くしてはいけない。でも、表に出してもいけない。少しでも長く生きるためには そうあの人は言っていた。

なのに、見せてしまった。涙を流してしまった。あの人に近づきたくて、あの人に認められたくて、生きてきたのに。

勉強は学年でも一桁に入るほどの秀才で、運動だってできる。顔もよくて、話だってできて、とても気がきく。感情豊かで、人気者。

悩みなんてない、完璧な人。みんなは私のことをそう思っているはず。

でも本当は……全部計算の上だった。感情をコントロールして、周りをあざむく。他人なんか信じない、頼れるのは自分だけ。でも、決して自分に嘘はつかない。

全てはあの人に会えたときのために

あの人に……会いたい

「そりゃ、あるよ。人間だもん」

その言葉のあと、奏歌はすっかり黙り込んでしまった。さっき寝たときと似た表情だ。奏歌のこんな顔は、正直見たくない。他の男のことを考えて、苦しんでる顔だ。

なんで俺と話してるのに、他の男のことすぐぐムカついた。その男の方に対してだ。

奏歌が寝ていたときの言葉……思い人がいるとしか思えなかった。

その上奏歌の目は真っ赤で、そいつは奏歌のことを苦しめているのだとさとした。

奏歌は苦しめられている。なのになぜソイツのことをを思うのか、わからなかった。そんなに魅力的なのか。俺は苦しめたりなんかしない。ずっとそばにだっついていれる。なのになんでソイツなんだ。ソイツは誰なんだ。

一体それは……

「一体誰なんだ」

「一体誰なんだ」

「……………何が？」

魅輝が唐突に口を開いた。私が返事をする、少し驚いて、顔を赤らめた。相変わらず訳のわからないやつだ。

「奏歌、お前は一体……………誰を思っているんだ」

「!!!!!!」

心の内を見透かされたような気分だった。ネヴ……………と言うわけにもいかず、言葉に詰まってしまふ。すると、耳まで真っ赤になった魅輝が、あわてて言い直した。

「ごめん、忘れて！気にしないで！」

とてもあたふたして、少し笑ってしまった。

しかし、危なかった。向こうがさがってくれたから良かったものの、問い詰められたらなんと答えていいものか……………。

「誰なんだ」

つぶやいてみる。正直、自分自身わかってはいないかもしれない。

私はあの人と、話すどころか出会ったことさえないのだから。しかも向こうは、私のことを知らない。それでも、私はあの人のことだ。

？ネヴ？他ならぬあの人の呼び名だ。本名は知らない。

黒い爽やかな短髪に、シャープな顔筋。キリツとした眉に、スツと高い鼻。そして、とてもキレイな瞳。何色と表現したらいいのかわからない……とても澄んでいる。グレーに近く、少し青みのかかったような、美しく深みのある眼だ。その顔立ちはとても美しく、女性とも男性とも見てとれる不思議なもの。声は心まで響き、風のように流れる。

でも私は、その美しい容姿や声に焦がれているのではない。ネヴの中身、考え、生き様 見えない全てに惚れたのだ。

その美しい声と顔を巧みに変化させ、人々を魅了しあざむく。自分だけを信じ、人と繋がりをもとうとしない。他人を騙し、脅し、利用する。それでも決して嘘はつかない、筋の通った人。そして、復習に生きる

会いたい。とても、とても、焦がれる。会いたくて会いたくてしかたがない。

頭のどこかではわかってるんだ、会えるはずがないと。それでも、いつか会えると信じていたい。現実が怖くて、誰にも言えないこの思い。否定され、そんな人いないと言われるのが怖くて、隠し続けたこの思い。いつまでも膨らみ続けて、会いたいネガイはつるばかり。

人の為に泣くな。怒るな。溜め息などつくな。生きたければ、他人に隙を見せるな。

全てネヴの言葉だ。閉じ込めていた思いは膨れ上がって、もう制御

出来なくなってきた。ネヴの言葉は、ネヴへの思いによって守れなかった。全てはネヴの影響。もう私にとってはなくてはならない存在だった。

押さえきれない想いを、今ここで告白します。

あの人の呼び名はネヴ。

小説の、かっこいい、かっこいい主人公。
いつか逢えると、信じてる

第二話 くワタシノネガイ（後書き）

こんな素人の作品を見てくださり、ありがとうございます。

今回は、軽く状況説明といった感じで書か

せていただきました。いかがでしたでしょうか？

感想、レビュー、評価など、次話の参考にしたいと思いますので、
よろしく願います

次話からは、やっとストーリーらしいものになっていきます！！

会えない人に恋をしてしまった奏歌と、そんな奏歌を一途に思う魅
輝。その結末はいかに！！

これからも、どうぞよろしく

第三話　〜ミキノネガイ〜

その日から私は、毎日ネヴの夢を見た。

地面は見渡す限りの草原で、空は晴れ渡り、所々に真つ白な雲が浮かんでいる。息を吸い込むと、あたたかい、やさしい空気が入り込んできた。とても美しい地だ。そしてどこからともなく、彼は風と共にやって来て、私に一步一步歩みよって来る。その美しい顔には、嘲笑に似た笑みがうかべられていた。彼は数多の笑みを使い分けている。風が流れた。優美なしぐさで手がさしのべられ、私がその手を受けとると、風に流されるかのような感覚で、現実世界に引き戻された。

そのとき私は、いつも、目に涙をうかべている。

その涙は、悲しみによるものなのか、喜びによるもののかは全くわからない。

夢の中で、ネヴの表情や動きはハッキリとわかるのに、顔立ちは霧のようなものがかかっているかのようだった。文章で見たものを画像にしているから、細かい部分はハッキリしなくて当然なのかもしれない。だが、そのことは、実際にネヴを見たことがなく、想像上であるから起こることなのだ。その上夢だったのだから、目が覚めたときの落胆はハンパじゃない。

しかし、何度もネヴに会う夢を見ていることで、？これから会う？というお告げ、正夢ではないとも思える。しかも、たとえ夢の中でさえネヴに会えると嬉しい。

夢を見る度に、想いはどんどん強くなり、ネヴについて考える時間

も増えていった。

初日は動揺を隠せず、すごい形相をしていた……と、周りの友人だ
と思い込んでいる人たちが言っていたが、今ではすっかり隠してお
している。頭の中ではいつもネヴのことを考え、悩んでいるが、見
た目は満面の笑みでガールズトークをしていたり、数学の方程式を
解いていたたり。

ただ、一つ心配なことがある。
それは

今日も私は学校に向かう。今朝もネヴの夢を見たが、もういい加減
慣れてきてしまった。

学校に着きクラスに入ると、なんだか私の机の近くに人が群がり、
騒がしい。正確に言うと、私の隣の机 魅輝の周りだ。いつもの
ことではあるが、あまり賑やかなのは好きではなかった。

「おはよう」

いつもと何一つ変わらない、爽やかな笑顔で挨拶をした。

「おはっ！」

「おはよーさん」

口々に挨拶が返ってくる。

「…………おはよう」

このビミョーな返事をしたのは、私の心配事、魅輝だ。魅輝は人気

者で、クラスの中心的人物。魅輝の周りに人が集まるのもそのせいだ。つい三秒前までは元気にみんなとはしゃいでたはずなのに、私と会った瞬間、妙におとなしくなる。魅輝とは、あの日からずっと、なんだか気まずい雰囲気なんだ。てゆうか、少し怒ってる感じがする。

脈アリだと思ってたんだけどな……

自慢じゃないが、私はよくモテる。魅輝の態度や行動は、私の経験上、？好き？のサインだったんが……違ったのだろうか。まあ別にいいけど。私が好かれたいのにはネヴだけだし、今まで告白されたことはたくさんあったけれど、他に好きな人がいると言って全て断っていた。好きな人とは、もちろんネヴのことである。

キーンコーンカーンコーン……

予鈴が鳴った。皆がガタガタと自席に移動し始め、私と魅輝が取り残される。きまづさを感じつつも、目をそらせない。無言のまま、見つめ合う。恋人どうしみたいだ。

ネヴと　こんな風にできたら幸せだな

こんなときでも、ふと考えてしまう。

すると、今まで立ち尽くしていた魅輝がいきなり、ふいっとそっぽを向いてしまった。そして、かなり大きな音をたてながら席についた。よくわからないが、やっぱり怒っているらしく、私への態度だけ、そっけない。

授業中もおとなしく、しかめっ面をしていて、全く話しかけてこない。

いつもはしつこいくらい話しかけてきたり、ニコニコヘラヘラして
るのに

おかげで、周りからは、私が何かして怒らせた、と思われてしまった。魅輝がいくらおとなしくても全然かまわないのだが、変な噂をたてられては黙っていられない。

ああ、めんどくさい。

「魅輝さあ……ウチ、なんか気にさわるようなことしたかなあ……？」

こういうときは、少し目に涙を溜め、うるうるとした瞳で上目使い。これで口答えする男はいないね！

魅輝はこっちを見て、少し間をあけて、また背を向けてしまった。なにか呟いている。

「……ず、……いん……よ」

「何？聞こえな」

『ずるいんだよ！』

あつけにとられた。何のことを言っているのかわからない。狂ってしまったのかとも思ってしまったまほどだ。しばらく沈黙が続き、消え入りそうなほど小さな声が聞こえてきた。

「……ごめん……こんなこと……言いたかった訳じゃ……」

感情の上下が激しすぎてついていけない。

「放課後……放課後、体育館裏に来て。待ってるから」
今度は、真っ直ぐで、固い決意の言葉だった。

最後の授業がおわり、そそくさと教室を出ていく魅輝。周りからの放課後のお誘いをていねいに断りながら、周りに群がる人の中を抜けるのは大変そうだ。その様子を見ながら私は考えていた。

魅輝はかなりの人気者で、休み時間にはいつも人が集まっている。元サッカー部で、運動神経が凄くいい。体育の授業中は、いつもかなりの女子ギャラリイがいた。頭も悪くないし、顔も悪くない。しかも、とてもユニークだ。よーするに、モテる。とにかくモテる。

そんな彼に呼び出された。今までは断ってきたが、そろそろ彼氏の一人くらい、いてもいい頃かと思う。しかし？好き？と口にすることは偽りになってしまいうのでできない。何か工夫しないと……

まあとにかく、アイツ人気者だし、お似合いの二人ってことで、告白OKしちゃおうかな

そんな思いを胸に、私は体育館裏へと向かっていた。魅輝の思いも知らずに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5847y/>

たったひとつの願い

2011年12月11日14時58分発行